

平成 22 年 6 月 11 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19730402
 研究課題名（和文） 対人認知の発達に関する統合モデルの構築－特性推論における幼児・児童と成人の比較－
 研究課題名（英文） The building of the integrated model on the development of the person cognition
 研究代表者
 清水 由紀（SHIMIZU YUKI）
 埼玉大学・教育学部・准教授
 研究者番号：30377006

研究成果の概要（和文）：人は他者の行動を観察したときに、推論しようという意図がなくても瞬時にその人物の特性を自発的に推論する傾向がある。本研究では、このような自発的特性推論の生起について、小学5年生、中学1年生、大学生を対象とした、再学習パラダイムを用いた3つの集団実験により検討した。その結果、日本人においては自発的特性推論はポジティブ特性暗示文に対してはほとんど生じず、ネガティブ特性暗示文に対してより生起しやすいこと、またその傾向において年齢による差はほとんどないことが示された。また、幼児を対象とした個別面接による実験により、幼児期の自発的特性推論の形態について探った。

研究成果の概要（英文）：Previous studies have reported that people tend to spontaneously make trait inferences from exposure to others' behaviors without the intention to do so. In the present study, three experiments investigated the occurrence of spontaneous trait inferences (STIs) among Japanese 5th-graders, 7th-graders, and undergraduates using the relearning paradigm. Results suggested that 5th- and 7th-graders as well as undergraduates showed STIs from behavior descriptions that implied negative traits, although they showed few STIs from descriptions that implied positive traits.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	630,000	3,930,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：対人認知，パーソナリティ，自発的特性推論，他者理解，発達，児童期，青年期

1. 研究開始当初の背景

社会的存在であるわれわれ人間が適応的に生きていくためには、対人認知を発達させていくことが不可欠である。近年、社会心理学の対人認知研究では、他者の行動を観察しただけで、即時に、意図なく、無意識に行為者のパーソナリティ特性を推論するという自発的特性推論 (spontaneous trait inference) が報告されている。しかし、これまでの研究は欧米人の成人を対象としたものに限られており、行動の原因として役割や状況要因を重視する傾向のある日本人においては、自発的特性推論は見られないのではないかと予測されてきた。また、自発的特性推論に関する発達心理学的アプローチによる検討はなされてこなかった。

2. 研究の目的

本研究では、自発的特性推論の生起メカニズムを探るため、日本人の大学生のみならず子どもも対象として、自発的特性推論の発達プロセスを解明することを目的とする。自発的特性推論の生起プロセスに関して、同一のパラダイムを用いて子どもと成人を比較する。それにより、われわれ人間にとっての対人認知の本質的な意味について探る。

3. 研究の方法

3つの集団実験(実験1~3)および1つの個別面接による実験(実験4)を実施した。

[実験1~3]

(1) 要因計画：年齢群(2もしくは3)×試行タイプ(2; 再学習・統制)×特性価(2; ポジティブ・ネガティブ)×生起頻度(2; 高・低)

年齢群は被験者間要因，試行タイプと特性価は被験者内要因である。特性価は実験2と実験3のみ，生起頻度は実験4のみである。

(2) 実験対象者：実験1は中学1年生74名，大学生64名。実験2は小学5年生78名，中学1年生74名，大学生64名。実験3は小学5年生43名，大学生105名。

(3) 手続き：Power Pointの画面を呈示して一斉に行った。①接触課題：顔写真と行動記述文のペアを呈示。10ペアが特性暗示文，10ペアが特性を暗示しない中立文であった。②混乱課題1：文章と顔写真の印象評定およびアナグラム課題を実施。③学習課題：顔写真と特性語のペアを呈示。再学習試行では①におい

て特性暗示文がペアになっており，統制試行では①において中立文がペアになっていた。なお再学習・統制試行はそれぞれ10試行であり，実験2と実験3ではいずれもポジティブ語とネガティブ語が半数ずつであった。④混乱課題2：アナグラム課題を実施。⑤再生課題：顔写真のみを呈示し，③でペアになっていた特性語を回答させた。ここで正答数が，再学習試行>統制試行となれば，自発的特性推論が生起したことの指標となる。

※実験3では，⑤再生フェイズのかわりに，再認課題を行った。写真と特性語のペアを提示し，先ほどのペアと同一かどうか，またその判断の確信度を判断してもらった。

※実験4では，予備調査によって日常場面における起こりやすさ(生起頻度)を調べ，接触課題で提示した行動記述文を生起頻度高と生起頻度低に分けた。

[実験4]

幼児における自発的特性推論の形態を探るため，4~6歳の幼児52名を対象とし，他者についての自発的特性推論の発達について個別実験により検討した。見知らぬ他者の行動を絵と口頭で提示し，最初の反応がどのようなものであるかを問うことにより，自発的特性推論の形態について探った。

4. 研究成果

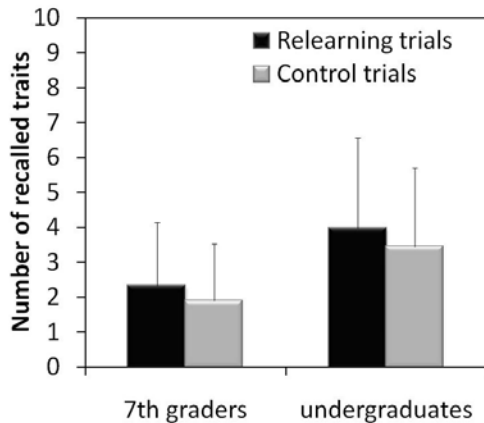
[実験1~3]

自発的特性推論はポジティブ特性暗示文に対してはわずかしか生じず，ネガティブ特性暗示文に対してより生起しやすいこと，またその傾向において5年生・中学生と大学生の間に差はないことが明らかになった。また行動の起こりやすさ(生起頻度)の要因は，自発的特性推論の生起に関連しなかった。したがって，ネガティブ行動は日常場面において目撃されにくいから自発的に推論されやすいのではなく，ネガティブ特性を暗示しているから自発的特性推論が生起しやすいことが示唆された。

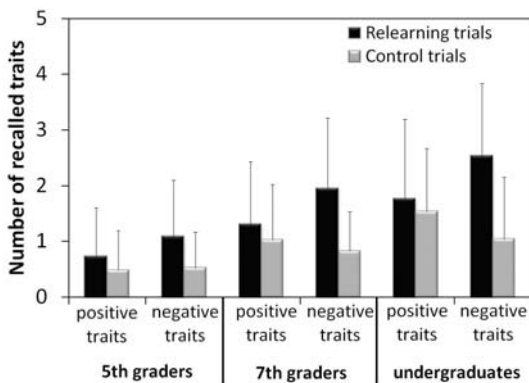
これまでは自発的特性推論において，欧米のデータしか示されていなかったが，集団主義的な文化であり特性推論が見られにくいとされる日本人のデータにおいても自発的特性推論が見られたこと，ネガティブ特性の方が

見られやすいこと、また青年期前期の子どもにおいても見られたことが示された。したがって、自発的特性推論は文化によらず普遍的なプロセスであると推測される。

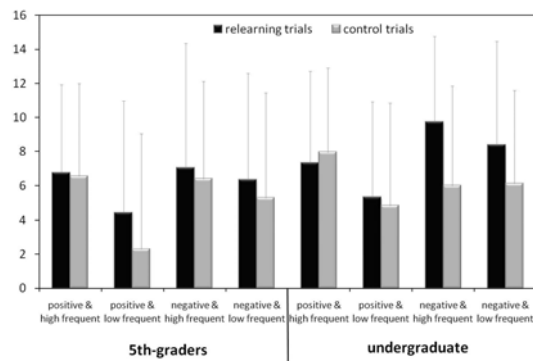
なお、実験3では5年生において、いずれの特性価においても、自発的特性推論が生じなかった。なぜ5年生において自発的特性推論が確認できなかったのか、再認を指標としたことが、5年生の推論プロセスにどのように影響したのかを探ることが今後の課題である。



実験1 再生課題における正答数の平均(SD)



実験2 再生課題における正答数の平均(SD)



実験3 再認課題における再認得点の平均(SD)

[実験4]

見知らぬ大人に対し、4・5歳児は性別や見かけを手がかりにして、また6歳児はコミュニケーション場面の状況を手がかりにして、自発的に特性推論を行うことが示唆された。幼児においても自発的特性推論が生じる可能性が示唆されたが、そのプロセスを抽出するパラダイムを開発することが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①清水由紀 (印刷中) 小中学生と大学生における自発的特性推論. 心理学研究.

[学会発表] (計9件)

①清水由紀 (2010) 幼児における危険認知の発達過程—向社会的行動と危険回避行動のジレンマ場面において子どもはどのようにするか?. 日本発達心理学会第21回大会発表論文集, p. 569. 2010年3月28日

②Yuki Shimizu (2009) Spontaneous trait inferences among Japanese: Factors of negativity and frequency. APA (American Psychological Association) 117th annual convention, Poster Session. Toronto, CANADA. 2009年8月8日

③清水由紀 (2009) 児童と大学生における他者の展示ルールの理解—他者のパーソナリティ特性に応じた予測が可能か?—. 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, p. 623. 2009年3月25日

④清水由紀 (2008) 他者についての特性概念の発達過程 (ワークショップ「子どもにおける自己と他者—言語報告による検討—」話題提供) 日本心理学会第72回大会, 2008年9月19日

⑤清水由紀 (2008) ネガティブな特性は自発的に推論されやすいか?—中学生と大学生における再学習課題を用いた検討—. 日本心理学会第72回大会発表論文集, p. 146. 2008年9月20日

⑥Yuki Shimizu (2008) Danger avoidance or prosocial behavior? 20th Biennial ISSBD (International Society for the Study of Behavioural Development) Meeting, Poster Session. Würzburg, GERMANY. 2008年7月16日

⑦ Yuki Shimizu, & Megumi Komori (2008) Spontaneous trait inferences among Japanese children and college students. 9th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Poster Session, B108. Albuquerque, USA. 2008年2月8日

⑧ 清水由紀・小森めぐみ (2007) 大学生と中学生における自発的特性推論－再学習課題を用いた検討－. 日本心理学会第71回大会発表論文集, p. 238. 2007年9月20日

⑨ 清水由紀 (2007) 対人葛藤場面における他者の行動予測の発達過程－幼児・児童は他者の性格特性に基づいて対人葛藤方略を予測できるか－. 日本教育心理学会第49回大会総会発表論文集, p. 12. 2007年9月15日

[図書] (計2件)

① 清水由紀 (2009) 藤村宣之編 児童期②友人とのかかわりと社会性の発達. いちばんはじめに読む心理学の本 3 発達心理学－周りの世界と関わりながら人はいかに育つか. pp. 108-124. ミネルヴァ書房.

② 清水由紀 (2008) 内田伸子編 よくわかる乳幼児心理学. pp. 132-135, 198-199. ミネルヴァ書房.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 由紀 (SHIMIZU YUKI)
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：30377006

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：